

“始まり”と“初め”

渡辺 祝子

「始まり」とは似たような言葉で

あるが、まったく異った意味が含まれて
いるように思う。私たち現職にある
者は、この二つの言葉の違いを痛切に
感ずることが、日々の保育の中でし
ばある。

“始まり”

まずこの言葉から連想されること
は、入園式である。子どもたちの肩の
あたりが緊張で固くなり、張りつめた
気持ちが大きいため息となって聞かれ
る時、小さな胸のうちは極限に達して
いる。式の時間をいかに短かくしたら
よいか、むしろもっと別の方法はない
ものかとさえ思いたくなる。

このように集団生活の中で経験する

「始まり」はあらかじめ保育者側が計
画準備したものである。したがって子
どもの発達を考え、無理がなくゆとり
のある活動がとれるように計画をたて
ることが必要となってくる。

“初め”

今までに経験したことない場面に直
面した子どもは、非常に好奇心と興味
をもってそれにぶつかっていきこうとす
る。そして経験をつみかさねることに
より自信を得て成長していく。「初め
て」の場に直面したときその感動をう
とけめ、子どもたちに満足感をあたえ
られるような保育者になりたいと願っ
ている。

“始まりと初めが出会ったとき”
登園をしぶっていたA子はちょっと
したきっかけをつかみ、進んで登園す
るようになった。

母親は「A子が自分からはじめて、
『行く』といいました」と感激して報
告にきた。これはまさに「始まり」と
「初め」の出会いである。

このように一致した時、子どもは力
強い一歩を踏み出すことになる。こう
した一歩を踏み出すまでの時期は保育
者がどのように待つかによってわかっ
てくる。子どもの芽を充分のばす場合
と反対にすみとってしまふ場合とがあ
る。ここに幼児教育のむずかしさがあ
る。一人一人の成長の過程を見つめ考
えるとき、もう一度自分の保育をふり
返って見たくなる。

(まんとみ幼稚園)